



白夜の廻廊
世紀末文学逍遙

川村三郎

岩波書店

白夜の廻廊

世紀末文学逍遙

川村二郎



岩波書店

白夜の廻廊

一九八八年一〇月二六日 第一刷発行 ©

定価一八〇〇円

著者 川村二郎

発行者 緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二一五五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三上六五二四二二
振替 東京六二六二四〇

印刷・大日本印刷 製本・松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたしません

Printed in Japan
ISBN4-00-001904-X

目
次

「白夜」の夢——序に代えて…………… 1

I 世紀末の周縁

ペイターの導き…………… 9

プシュケーの美…………… 20

「朝」の空白…………… 31

並列する幻…………… 42

詩的ドン・キホーテ…………… 53

聖ダンデー…………… 64

翻訳詩の機微…………… 75

翻訳家李太郎…………… 86

詩とジンメル…………… 97

深く甘美な「歌」	108
「母の闇」と詩	121
赤き薔薇まず来る	133

II 生の薄明

〈美しくよき少年〉	147
——ペイターのプラトン像に即して	
ホフマンスタールと音楽	159
ホフマンスタールの遺作短篇についで	169
アドルノとゲオルゲ	185
老いたる蕩児の春の夢	202
——シュニッツラーのカザノヴァ物語	
あとがき	233

「白夜」の夢——序に代えて

「白夜」という言葉への執着は、ウォルター・ペイターの『享楽主義者マリウス』第二章の表題、WHITE NIGHTSを目にした時以来、心に滲みついて離れない。この本の中でもくり返しふれたことだが、「白」の奥深い豊かさ、その夜の中では眠りもあだな空白ではなく、啓示の夢に満ちている、といった白い時間のひそやかさが、何より魅力的に感じられたのである。

しかも、ペイターの物語の中では、「白夜」とは主人公マリウスの住居の名とされている。彼の生れ育ったその家のあたりは、都ローマから遠く離れたイタリアの田園地帯で、都ではもろもろの新しい宗教が勃興し、古い宗教と激しく争っている時代だというのに、こちらで

は昔ながらの民俗に即した祖霊崇拜や自然信仰が、ひっそりと守り続けられている。「白夜」はそうした信仰の空気にひたされて、半ばうつらうつらとしながら静かにつつましく生きている、人間の生そのものを暗示してもいる。

ハンガリー生れの神話学者カール・ケレーニイの「白夜叢書」を知ったのは、ペイターの「白夜」にふれてからおよそ十年ばかり後、昭和三十年頃のことだった。西欧古代の心の深みを、神話・宗教・学芸の綿密な解明を通じて探ろうとする、このシリーズに気持をひかれたのは、柳田国男や折口信夫の仕事からすでに単なる知的刺戟以上のものを感じ取っていたのだが、また、シリーズの名「白夜」ALBAE VIGILIAEが、ペイターの『マリウス』の「白夜」にもとづいていると知ったせいでもあった。ケレーニイは「白夜」を、「哲学的な熟慮に支えられた探究者の、直観に満ちた夜」と解釈していて、西欧人文学の伝統を古代研究において継承し顕揚しようとする意向は明らかだが、その意向を先導するのが、大帝国の中心から遠い、牧歌的な田園生活の四季に育まれた、つつましやかな心性のイメージであるということとは、いかにも特徴的だと思われた。

トーマス・マンに宛てた手紙の中で、ケレーニイは「牧歌」について語っている。「牧歌」的なものには人間の生の可能性が潜んでおり、これを実現するのに「ニーチェとウォルタ

「ペイター」とが、ひとしく与つて力があつた、というのである。今「と」に傍点を付したのは、原文 *mit* が、イタリックになつてゐるからで、この二人を「と」で結びつけることに、書き手が一種のこだわりを感じたからではないかと推測される。つまり一見して、近代に対する激越な挑発と否定の魔たるニーチェと、細心温柔的な美的享受の使徒たるペイターとが、近しく見えはしないであろうことを、気づかっているように思われる。それにもかかわらずあえて二人の名を並べるのは、たとえばクロード・ロランの風景画やシュタイフターの『晩夏』を鍾愛するニーチェと、田園の「白夜」を頌えるペイターとの、内密な親和を指示したいからにほかならぬだろう。

「牧歌」だけではもちろん古代と人間の探究(フマニスムス)にとつて充分ではないと、ケレーニイは認めている。そしてケレーニイ自身の探究の成果の数々は、およそそのどかな古代幻想の類とは一つにならぬ、錯落たる神話的原型の複合への洞察と、その複合の孕む神秘への直観を、鮮やかに示している。迷宮、道祖神、エレウシス密儀、ディオニソス祭儀、任意にどのような主題を扱つた彼の著作を手にとろうと、眩暈を惹き起す古代の深みの認識が、そこで生き生きと活動していることを、読者の誰もが肯わねばならぬだろう。

だが、そうであればあるだけ、それらの幽晦な対象を相手取つた論考の集成に、「白夜」

の名を与えたことが、ゆかしく意味深く思われるのである。内容はともかく、この命名自体はむしろ、前代の遠々しく気疎い趣味を反映しているだけではないか、と感ずる向きも、あるはあるかもしれない。しかしそこで、時期をたずねることはおそらく無駄ではない。「白夜叢書」が構想されたのは一九三八年。ヨーロッパの緊張が一触即発の危機を迎えた年で、やがて戦火がヨーロッパ全土を覆いつくし、破局が迫っていると、ケレーニイはナチス・ドイツに支配された故国ハンガリーから、スイスへ亡命せざるを得なくなる（一九四三年）。あまつさえ、彼自身ではないが、彼の娘はゲシュタポに逮捕され、アウシュヴィッツに送られるという辛酸を嘗めねばならなかった。

そのような時期に、古代への黙想と観照を旨とした研究にいそしみ続けるといふのは、いかにも書齋の徒らしい迂遠な没常識の態度と見なされるだろうか。だが、世界の現在が暗ければ暗いほど、このいわば時間の暗さの中で、時間に関らぬ生の原型的な本質を、確かに見定めようとする欲求が、明るく輝きだすのも、認識をこととする人間にあっては、生理の必然といわねばならぬのではなからうか。

ケレーニイがスイスへ逃れ、ブダペストに残してきた娘の逮捕の知らせに憂慮し、ハンガリーの絶望的な状況に痛憤しながら、「白夜叢書」新集の第一巻『魂を導く神ヘルメス』と

第二卷『小説と神話(トーマス・マンとの往復書簡)』を、チューリヒのライン出版社から刊行していた一九四四年、こちらはペイターの「白夜」を初めて知ったのだった。自分一己から類推するおこがましきは承知の上だが、周囲の空気が肉体に重過ぎるほどに感じられたからこそ、それだけ白夜の白々と澄んだ夢が慕わしく思われたのは間違いないことだった。

「牧歌」については、その翌年、敗戦の年に読んだエルンスト・ベルトラムの『ニーチェ』で明確な概念を与えられた。マンとの往復書簡の増補版の序文で、ケレーニイはこの『ニーチェ』を、「文学の成果」として高く評価するといっているが、こちらにとつては、この大著の中で、ニーチェのクロード・ロランやシュティフターへの偏愛を語っている部分が、何にも増して啓発的であり喚起的でもあった。ただシュティフターというなら、敗戦後ドイツの作家ノサックが、シュティフターの文学を、「大旋風の中心の無風状態」における牧歌とたとえていたのが、忘れがたく記憶に刻まれている。颱風の眼の中の、一時たてばたちまち消えてしまうであろう牧歌の静寂。まさにそのはかなさ故に静寂は貴重なのだと思う気持と、「白夜」の夢に対する執着とは、おそらくぼくの内側で複合してしまっている。以下はその複合状態から生れた感想の記録である。

I
世紀末の周縁

ペイターの導き

工藤好美氏の、文字通り記念碑的といつてよい三冊のペイターが、近年続けて復刊されたのは、『ウォールター・ペイター短篇集』昭和五十九年、『享楽主義者マリウス』昭和六十年、『ウォールター・ペイター研究』昭和六十一年、いずれも南雲堂）、ぼくにとつてはまことにありがたくもあり、なつかしくもある出版界の慶事だった。

なつかしいというのはむろん個人的な思い出にかかわる。今からはもう四十年の余も昔、昭和十九年に、ぼくは旧制高等学校の一年生だったが、古本屋で国民文庫刊行会、上下二巻の『享楽主義者メイリアス』を見つけたのが、工藤氏のペイターとの最初の出会いである。ことわるまでもない戦中、というよりすでに敗色濃厚な戦争末期の日々のことで、新刊の文

学書などは無きにひとしかった。たとえば『岩波書店七十年』でこの年の刊行物をたしかめて見ると、翻訳文学は岩波文庫のアリストパネスの『鳥』、僅かに一点のみである。しかもこの種の新刊書は、書店に特別なコネクションがあるとか、見返りにしかるべき書物を提供するとかいうのでなくては、容易に手に入らなかった。店頭白白とした書棚に並んでいる文庫本といえば、せいぜい『名将言行録』や『吾妻鏡』の端本ばかりだったのである。

当然、古書を漁っても、これはというものがおいそれと網にかかってくる筈はない。知識欲の最も旺盛な時期の少年にとつて、慢性的な飢餓状態を意味していた書籍大欠乏時代だっただけに、頑丈なボール函に入つた美しい緑色のクロス装の『享楽主義者メイリアス』を、黴臭い小さな店の片隅に発見した時は、何か信じられぬ思いだった。しかし次の瞬間、ためらうことなしに重い二冊本を抱え上げて、無愛想な店主の前へ運んだ。廉くはなかったが、一瞬のためらいが後々までの悔いを生むことは、数々の苦い経験からもう充分に心得ていた。それにしてもなぜペイターに執心したのか。この時よりそれほど前ではなかったと思うが、とにかく『ルネサンス』(佐久間政一訳、春秋社)と『ペーター論集』(田部重治訳、岩波文庫)とを、すでに読んでいた。後者に関しては、『凶書』の臨時増刊、岩波文庫創刊六十年記念「私の三冊」で菅野昭正が取り上げて、こう書いている。

訳文については言うべきことと少なくないが、文学・芸術を論じる批評文が、これほど精緻かつ柔軟な思考と感覚の運動を表現し得ることに、眼を見張らされた記憶が忘れがた
い。

これはそのまま、こちらの感想として借用させて貰いたい言葉だが、さし当り「訳文については」という所に、いかにもそうだったと同意を表明して置きたい。この田部訳と云い、また『ルネサンス』の佐久間訳と云い、お世辞にも読みやすい訳文とはいえなかった。まだ原文を知らなかったにしても、それがいわゆる平明な英語の文章であり得ないことは見当がついたし、単純な平易明快を翻訳に求めるにしては、少年なりに（あるいは少年であったが故に）佶屈聱牙の文の魅力に心をひかれ過ぎていた。だからすらすら読めないからといって不満を感じたわけではない。佶屈というよりギクシャク、古色を帯びたというより堅苦しく弾力性を欠いた訳文の道筋に、相当のもどかしさを覚えながら行きなずんだということである。その時にめぐり会った『メイリアス』の工藤好美訳の、古風な格調を保ちつつしかもしなやかな、微妙な陰翳に富んだ日本語の表現は、それだけ一層貴重なものと思われたのである。